

仁之亂に紛失仕候由。其後書留置候を、十ヶ年以前上様より大夫共、其外頭立候役者共、系圖可指上旨被仰出、則八郎書改上之申候。八郎方にも、平四郎方にも右の寫は、所持仕候由言上す。平四郎父權兵衛は、右大夫爲には何に候や、右大夫せがれ七郎、其嫡子は七郎と申候。權兵衛は四番目のせがれにて、右大夫孫にて御座候。且又竹田は川勝以來傳來の領知、大和・山城兩所の武田にて候故、本名武田にて御座候。則七郎も竹田を名乗申候。金丸は川勝の孫の童名金春と申候。夫より家名に仕來候。

一、大夫に太閤より、大和の内坊城と中野と兩所にて、五百名被下候。其御朱印七郎方に御座候。

一、猿樂と云こと御尋候處、川勝之時分初は神樂と申候得共、神樂は其號恐れありとて、示篇を除て申樂と號候由。ひよみの申の字を用候。

一、觀世は觀阿彌と申東山殿阿坊之由、其子世阿彌、其子音阿彌など、申候。世阿彌は金春七郎法名禪筑が舅の由。保昌は觀世座より出で、金剛は金剛座に附たる由。金剛大夫の内に秀でたる者あつて、花金剛と申者有之由御聞被成

候。今の金剛より四代前にて、大大夫時代と承候。

一、金春當八郎より、公儀へ差上候系圖の寫一卷上之候。俗語にて由緒を少しづゝ記し置候。其内に天之面傳來之事載之。是は久我殿にある天之面とは違候やと御尋候處、大大夫父の八郎時代迄は、一度宛拜見仕候得共、大大夫時代より恐れ候て七重の箱に納て開不申候。面は何と申儀か秘して不申傳候。袋は錦にて、地色は辯金にして、釘貫と蝶と牡丹とをちらしたるもの由。其模様を大大夫父八郎時に模し置申候。當八郎方にも其模様能道具仕立置候。平四郎儀も先年御能道具の内に、地色を赤く仕り、紋は右の三品を付、唐織に仕置候由言上す。又庶流を書記し候系圖は無之や御尋候處、左様の物は無御座候。大大夫次男八左衛門へ、初て家業を傳候。是庶流へ藝を繼候初にて御座候。其前は嫡子迄傳授仕候。

一、詩歌小集旅窓花

三月廿六日小瀬助信・室直清・矢田亮惠招之。旅窓花と云題を以て詩歌を催す。庭前有一株櫻也。

旅窓花

源 助 信

一樹櫻花傍開。清香冉々逐風來。十分春色旅園裏。主客相看吟興催。

丹 直 清

白櫻新發傍柴扉。席上風來香滿衣。今日對花故鄉客。暫時相賞莫思歸。

矢 田 亮 惠

旅館花開春色闌。騷人催興倚欄干。鐘聲報暮思無限。好是通宵帶月看。

主 人 昌 興

解釋旅窓一片愁。友人相對思悠悠。嬋娟花下酌春酒。薄暮風輕香氣周。

和 助 信 惠 韻

主 人 昌 興

文席迎賓春宴開。櫻花香氣襲人來。長松琴韻響簾外。偏喜幽情詩酒催。

和 亮 惠 々 韻

主 人 昌 興

月下間窓興已闌。隣雞促曉恨若干。一樽春酒今將盡。賓主寫情相□看。

和 直 清 惠 韻

清宵花下自開扉。風送幽香入客衣。良友相思酌樽酒。幽情難已賦詩歸。

直清有約于知親。將辭云。主人手折花枝贈之。感其厚意。乃賦一絕且以和歌附之。

一 水 櫻井本會右衛門、知親別號也。

一枝滿手賞心香。艶々花房映艸堂。厚志無窮更堪報。雅懷終日詠吟長。

思ふぞよ袖にふれこし櫻花香もなつかしき人のこゝろを

次 韻 一 水 丈 寄 見 嘉 藻 主 人 昌 興

麗藻開來字々香。餘情冉々滿茅堂。閑中愛玩無當比。幾對櫻花感興長。

あはれしる君に見えずは櫻花色香もあだに成なんものを

再 和 松 風 兄 秀 作 一 水

春風櫻雪發花香。香氣紛々上高堂。勝地傳聞三芳野。不如君處□□長。

東にもかゝる花をし見よしのや吉野の山も名のみなる覽

再 和 一 水 惠 韻 主 人 昌 興

窗外雨晴竹葉香。晚來霞氣映虛堂。孤松呈綠紅花發。黃鳥